

●特別アンケート【番外編】

（競合エネルギー） 業界からの 苦言・提言

東京電力



片倉百樹

営業部DSM推進センター所長

だに記憶の中にしっかりと刷り込まれている。

私の故郷は広島県。広島から芸備線で一時間ほど入った山村である。父は田舎のその小さな村で高等学校を開き日曜学校をやっていた。毎週日曜日は礼拝があり、賛美歌を歌い、父のお説教を聞く。今にして思えばもったいないと思うが少年の私にはいささか苦痛な時間であり、唯一の救いは集まる子供たちのために母が焼いてくれるクッキーであった。色や形は不揃いで甘さもまちまちだが、その美味しさは未

変化がなく退屈な田舎にも秋になると私の出番が回ってくる。それはキノコ山の見張り番である。家の裏にあるキノコ山には、シメジやマツタケなど美味しくそして高く売れる茸がたくさん生えていて、この時期になるとその茸をちよつと失敬して商売をする輩が出没する。もちろん私の役目は、そんな輩が近づかないように山を守る仕事であるが、敵も心得たもので私が見張りをする明るい時間帯などに来るわけもなく、大概は早朝それも三時頃から入る者がほとんどである。もともと山に生える茸は自然の恵み

であり、地元の人達が近くで取れた茸を家に持って帰りたいたく程度のものであったが、松茸が次第に高価な商品として大阪や東京へ送られるようになると松茸狩りを商売にする人が村に入りするようになった。商売人は地元の人達が取った松茸を買い付けたり、裏情報を入手して松茸採りに山から山を渡り歩く者も入って来た。その採り方は手荒く茸が生息する環境を痛めつけて渡っていく。

父は、茸が惜しくて私に見張り番をさせたのではないようである。「自然の営みを狂わしてはいけない。このままでは山が駄目になってしまう。そして人の気持ちも…」と常々言っていた。しかし、結局父の心配は当たることになる。私が中学生の時、我が家は東京へ引っ越すことになったが、そのころには裏山はすっかり荒れ果て、松茸がほとんど取れなくなっていた。裏山だけでなく周辺の山の生態が変わってしまった。自然の恵みを当たりまえと思い、人の勝手な欲に駆られてとても大切なものを無くしてしまったのである。

私は現在電力会社に務めているが、エネルギーの供給と消費の現場に近い立場で仕事をしていると、遠い昔に聞いた父の言葉が戒めのように思い出される。エネルギーも基本的には自然の恵みであり、それを大切に使うとすれば人の気持ちがとても重要なのだと。エネルギーを大切に使うために必要なこと。それは使う人達に、どんな使い方が一番良いかを正しく伝えること、それが公益事業に携わる者の責務であると信じている。

今後は様々な機器システムとそのエネルギー利用効率のデータ公開に努め、最低やってはいけない使い方をまず知っていたら努力をしたい。電気事業も来年から本格的な競争が導入されるが、競争社会が価格と儲けだけを最優先にした社会になってはいけない。ガス事業者の方々にもぜひこの点をご理解いただき、二十世紀に向けて貴重な資源を繋いでいくためにもお互い協力してゆく関係をより強固に築きたいものである。その方策を広島産の「賀茂鶴」でも飲みながら悠々と考えることにしよう。